

平成 26年 8月 6日

学位論文審査並びに最終試験結果報告書

大学院心理科学研究科長 殿

主査 坂 野 雄 二



副査 中 野 倫 仁



副査 富 家 直 明



このたび 横 光 健 吾 にかかわる学位論文審査並びに最終試験を行い下記の結果を得たので報告する。

記

1 学位論文題目

病的なギャンブル行動の生起に影響を及ぼすギャンブルに関する認知の実証的検討

2 論文要旨

別添

3 学位論文審査の要旨

病的ギャンブリング (PG) は、本人や家族、あるいは職業機能を破滅させる持続的で反復的な不適応的ギャンブル行動を基本的特徴とする精神疾患であり、その有病率、および治療後の再発率は高く、社会的問題とも言える疾患である。これまでPGに対する治療には薬物療法と心理社会的治療法が有用であると言われ、特に、心理社会的治療法としては認知行動療法 (CBT) の有効性が指摘されてきた。しかし、CBTの作用機序に関しては明らかにされていない点も少なくない。そこで本論文では、PGに対する心理社会的治療法としてCBTの作用機序を明らかにすることを目的として5つの研究が行われた。

はじめに、1993年から2011年の間に刊行されたPGに対する心理社会的治療法の効果を見た213論文を対象として治療効果に関するメタアナリシスが行われ (研究1)、PGに対するCBTは治療終結期のギャンブル行動とギャンブル費用の減少、および症状の改善に有効であり、治療終結6か月後にもその効果が維持されていることを明らかにした。一方、多様な治療要素を含む複合的プログラムであるCBTのどの要素がCBTの作用機序に貢献しているかはメタアナリシスの結果からは明確にされなかったことから、研究2では、CBTを構成する治療要素PGに対するCBTの効果研究を行った論文を対象にシステマティックレビューを行い、認知再構成法、心理教育、および再ギャンブル行動予防法がCBTの有効性に貢献する治療要素であることを明ら

かにするとともに、ギャンブルに関する認知（GRC）の修正を行うことの重要性を指摘した。また、GRCの修正を行うための準備条件として、ギャンブルに関する認知を適切に評価することの重要性を指摘した。

次いで研究3では、我が国においてGRCを適切に評価することのできる尺度の開発を行った。成人男女536名を対象とし、これまで諸外国において多用されているGambling Related Cognition Scaleの日本語版標準化を行い、その信頼性、妥当性の検討等psychometricな諸特性の検討を行い、日本語版を作成した。そして、研究4においてタクソメトリック法によるGRCS日本語版の潜在構造の検討を行った。これらの研究の結果、女性に比して男性にGRCがより多く観察されること、男性ではGRCのうち「ギャンブルを止めることへの無力感」及び「解釈バイアス」が、女性では「ギャンブルを止めることへの無力感」と「ギャンブルへの期待」がPG症状を増加させていることを明らかにした。

最後に研究5では、PG症状を呈する成人男性4名を対象として、認知の修正を狙った認知再構成法、および心理教育、再ギャンブル行動予防法を含む5セッションからなるCBTプログラムを実施し、参加者のGRCの変化、ギャンブル行動の変化、参加者の発言の変化等を指標として、CBT実施に伴う対象者の質的・行動的变化を検討した。その結果、PG行動の発現に至るプロセスに改善を認めることができた。そして、上記5つの研究を総括する形で、今後我が国においてPGに対する心理社会的治療法としてCBTを実施する際の課題が考察された。

提出された論文を査読するとともに、口頭発表と質疑応答による面接審査を行った結果、以下のような結論を得た。

（1）先行研究のメタアナリシス（研究1）と記述的レビュー（研究2）によるPGに対するCBTの作用機序に関する問題点の指摘に基づいてギャンブルに関する認知の重要性を指摘し、それを評価する質問票を我が国で初めて作成する（研究3）中でギャンブルに関する認知のPGに及ぼす影響を明らかにするとともに（研究4）、ギャンブルに関する認知を修正することを含む認知行動療法プログラムを作成してその効果を見る（研究5）という一連の論文構成、研究の成果、論旨の一貫性や分析方法などの方法論において、本論文は所定の水準に達している。

（2）ギャンブルに関する認知がPGに及ぼす影響を明らかにし、ギャンブルに関する認知を修正することを含む認知行動療法プログラムを作成してその効果を見るという点は本研究のオリジナルな成果である。

（3）本研究によって作成されたギャンブルに関する認知を測定することのできる尺度は、本邦で初めてのものであり、本研究のオリジナルな点として評価することができるとともに、今後我が国においてPGに治療を行う際に十分活用できるツールであり、波及効果には大きなものがある。

（4）予備審査における研究発表と口頭試問において指摘された意見に対しても慎重で緻密な加筆修正が行われ、新たにデータ解析を追加し考察を加えるなど、より完成度の高い論文としてまとめられている。

（5）本論文の一部は、日本嗜癖行動学会誌（2編）、および日本認知・行動療法学会誌（1編）に原著論文として既に公刊されており、外部から一定の評価を受けていると考えられる。

（6）以上のことから、本論文は十分な科学性と独創性を持つ学術研究の成果であると判断し

た。

4 最終試験の要旨

最終試験では、学位論文の内容に関する口頭発表および質疑応答を行うとともに、申請者のこれまでの研究業績を精査し、さらに、外国語を含む専門的知識と技術に関して口述試験を行った。大学院在籍中に学会誌5編、紀要2編の論文を公刊し、国際学会での発表11件（内、口頭発表4件）、国内学会での発表29件（内、筆頭著者11件）を行うなど、積極的に成果を公表している姿勢も評価された。その結果、申請者は研究を遂行する能力が十分にあるとの判断に至った。

以上の結果 横光健吾 は博士（臨床心理学）の学位を授与する資格が ある ものと
ない
判定する。